【障害者の就労支援の取り組みと、工賃の確保について】

G：　日頃の取り組みとしては、障害者の就労支援ということで、主に鳴子を製作しています。鳴子は、年間５万組を製作させていただき、ホームページなどで全国に発信し、高知県だけではなく全国各地のよさこい祭りで鳴子をご利用・ご購入いただいています。

その製作と販売の利益が障害者の方の工賃になるということで、福祉施設の職員としては苦手な販売や営業をしており、原宿のスーパーよさこいや、名古屋、大阪などのよさこい祭りに職員が出向き、手作り鳴子教室などの活動をしています。よさこい祭りが全国的にブームになっていますが、一度ブームになったものが、だんだん小さくなってきている地域もあり、鳴子の売上げも右肩下がりになっています。そういうこともあり、鳴子だけでは障害者の方の工賃が確保できないということで、間伐材を利用して、木工製品の製作をしています。そこからノベルティグッズの製作や、原宿のスーパーよさこいのメダルづくりなどの木工製品の注文を受けるようにしています。

そういった中で、障害者の方の工賃の確保が私どもの課題です。今の工賃を少しでも下げないように、職員が営業なり製作なりをしながら、日々を暮らしているわけです。国の事業であります工賃倍増計画、５ヶ年計画の今年が５年目になっています。小高坂更生センターは、施設の中でも頑張っているほうだとは思うのですが、倍増までにはいきません。工賃を上げるにあたっては、いろんな課題があるのですが、一つは、受注の体制です。１つの施設で受注がたくさん来ると、受ける限界があることからお断りをしないといけない。また、こちらの施設の努力不足もあって、どんな商品ができるのか等のアピールができていない状況であり、官公庁からの受注の量も少ないという課題があります。

その中で、１つの施設では受けられなくても、施設が２つ、３つ協力すれば大量の受注が可能だということで、木工製品に限られていますが、ネットワークづくりを小高坂更生センターが中心になって進めています。ただ、これでもまだ受注の体制は整っておりません。こういう取り組みを障害保健福祉課の就労支援チームにご協力をいただいて、施設のシステム化、協力ができるシステムづくり、どことどこの施設が一緒にコラボして生産の受注ができるとか、というようなことが構築できれば、障害者の工賃アップにつながるのではと思います。

去年は龍馬伝のおかげで、小さな施設もお菓子の箱づくりなどで大変注文をいただいて潤ったといううれしい声をよその施設さんからも聞いていますが、今年になって箱の注文が１つもないというのが現状です。障害者の施設はどうしても末端にありますので、上のほうの受注がないと末端ではゼロになります。こういうご理解のもとに、またいろんなご支援をいただけたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

知事：　（今年のよさこい祭りの）はりまや橋商店街のメダル、小高坂更生センターさんが作られましたね。私、演舞場の応援に行くんですけど、今年のはりまや橋商店街のメダルにはふるさと博のキャラクターを入れていただいていたので、（そのメダルについて）伺

ったら、小高坂更生センターさんの製作だということで。素晴らしい、ハイレベル（な出来栄え）ですね。

G：　はい。上町の商店街や菜園場のメダルもそうですが、レーザーや、印刷ができる機械を、全部障害者の方が熟知して、技術として取り入れ、生産できるようになりました。はじめは、ストラップなど１カ月に１０００個と言われて断っていたんですが、今は１万個でも受けられるようになっています。ただ、他の施設にもお手伝いをいただいてできていることですので、もっと受注の体制を全体的に構築していければと思います。

知事：　共同受注の仕組みづくりというのは、是非進めていきたいと思います。法要のお返しのセットなどを共同受注していくなど、いくつかモデル的な取り組みを始めているそうですね。やってみて課題が見えてきたりもするでしょうけれども、それを克服して、その取り組みをもっと広めていきたいといった話を、県の担当から聞きました。

この共同受注により、より大きい仕事が取ってこられるように、また結果として障害者の皆さん一人ひとりの工賃がもっと高くなっていくような仕組みづくりというのは、我々としても一生懸命バックアップさせていただきたいと思います。

また、官公庁からの注文が少ないという課題については、もっと周知徹底するようにしたいと思います。

高知県は、かつて障害者の方の工賃が全国で１番だったそうです。今でも、全国上位ではあるそうですが、県でも何とか頑張りたいと思っています。県で就労支援チームの仕組みを持っているのは、全国でも珍しいんだそうです。今後とも是非一緒にタイアップさせていただきたいと思います。